Short History

# 歴代日本銀行総裁小史

第五回

## 第六代総裁 松尾臣善 まつお しげよし

「日本銀行総裁」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか？　このコーナーでは、歴代総裁の生涯をたどりつつ、総裁在任時に取り組んだ事柄や当時の日本銀行の歴史などをご紹介していきます。今回は第六代総裁の松尾臣善です。

【総裁任期】
明治36年（1903）10月20日～明治44年（1911）6月1日

松尾臣善は、天保十四年（一八四三）に播磨国（現在の兵庫県姫路市）で郷士の家に生まれました。幼少にして学を好み、特に算数の才に優れていました。その才を生かして四国宇和島藩（現在の愛媛県宇和島市）に仕えます。同藩直営事業の管理の功績により、明治二年（一八六九）、藩からの推挙を得て大阪府の国庫事務取扱を命ぜられました。その後、大阪府外国局会計課長を経て、大蔵省（現・財務省）に入省し、明治十九年（一八八六）の出納局長を皮切りに、主計局長、理財局長などの局長職を一七年にわたり歴任しました。

明治三十六年（一九〇三）、第五代日本銀行総裁山本達雄の任期満了に伴い、第六代総裁に就任します（副総裁は、後に日本銀行総裁や大蔵大臣を歴任する高橋是清）。

就任当時の日本経済は、金本位制の下で、海外からの輸入が高止まりしていました。金本位制の下では、貿易の最終決済は正貨（金）で行うことから、海外の輸出業者が、日本との貿易で得た金を海外に持ち出す（日本銀行が所有する兌換用の金が海外に流出する）ことが懸念される難しい局面でした。

そうした中、松尾は、高橋是清副総裁とともに、金本位制維持を企図した正貨準備確保および、日露戦争の戦費調達のための外国債の公募実現に力を尽くしました。

また松尾は、日露戦争後の好景気の反動で不況となることを憂慮し、その要因となりうる企業金融の過熱に対処します。それまでの日本銀行の貸出は公定歩合（商業手形の割引率）のみで対応していましたが、明治三十九年（一九〇六）、その率に最高・最低を設け、国債以外のものを担保とする場合にはその種類などに応じて利率を適用する高率適用制度を新たに採用しました。この制度はその後約五〇年にわたり、日本銀行の金利政策上重要な役割を担うことになりました。このほか、松尾は日本銀行条例に定められた営業年限（開業日から満三〇年。営業継続には政府の許可を要する）の延長許可取得に尽力したほか、日本銀行の支店や出張所の整備にも取り組みました。

二度目の任期半ばだった明治四十四年（一九一一）、円満のうちに総裁職を退任します。七年八カ月にわたる在任でした。その五年後の大正五年（一九一六）に松尾はその生涯を閉じました。七三歳でした。

高村光雲（1852-1934）作の松尾臣善像。昭和42年（1967）8月、日本銀行が松尾家から譲り受けたもの。
（日本銀行所蔵）

松尾は、実家の中根家（注）が檀家であった妙典寺（兵庫県加西市）に鐘楼堂を寄進した。中央の鐘は、第二次世界大戦中の金属回収令による供出のため、後に復元したもの。（写真提供：加西市観光まちづくり協会）
（注）松尾は中根家に生まれ、11歳の時、松尾家の養子となった。

兵庫県小野市にある松尾が明治40年（1907）に建てた別荘。明治末期の建築様式で、当時書斎だった部屋は良好な状態で残され、往時の姿を伝えている。現在は料亭として利用されている。（写真提供：小野市観光協会）